episode 18　我が家のジョージに

投稿者　**中島 理佳** さま（福岡県）

『おさるのジョージ』シリーズ
M. レイ ＆ H. A. レイ 原作
渡辺茂男 訳、福本友美子 訳
岩波書店　1999年

幼い頃から、「おさるのジョージ」が大好きだった。
子供の頃はジョージの気持ちで、ジョージと一緒にハプニングを楽しんだ。

大人になり、母になった今。
私は、きいろいぼうしのおじさんとなって、絵本の世界に入りこむ。おじさんは素晴らしい。
常にジョージを信頼し、「いいこでいるんだぞ！」と、どこか誇らしげな表情で冒険に送り出す。
どんなにジョージが騒ぎを起こそうと、絶妙なタイミングでかけつけ、怒ることなく手をつなぐ。
迷惑をかけられたまわりの大人達も、最後にはこう言ってしまう。「ジョージ ありがとう。ジョージばんざい！」

我が家の2人のジョージ達も、それは大変だ。
知りたい。やってみたい。ただそれだけ。キラキラと目を輝かせ、たくさんのいたずらを楽しむ。
スーパーヒーロー、きいろいぼうしのおじさんになれない私。つい大人目線で、大人都合で判断してしまう。
そう、全ては大人の理由。
核家族、ワンオペ育児、終わりのない家事。仕事との両立に悩み、立ち尽くす孤独な日々。
確かに実在するのは「今」なのに、いつも先を急ぎ、「今」を見過ごしてしまう。
「今」を楽しむ天才、ジョージ達は光をもって教えてくれる。キュッとつないだ小さな手の温かさ、その柔らかさ。
目の高さを、歩く速度を合わせてみれば、毎日は新しい発見に溢れている。
ささやかな日々には、たくさんの宝石が散りばめられ、人生は美しいと気付かされる。
大切なことは「今」を味わうこと。大人の理屈は脇に置いて、かけがえのない「今」を楽しんでいいのだ。
全力で泣き、全力で笑う。小さな体でたくさんの幸せを教えてくれる。
いつだって大好き。大丈夫だよ。いつだって見てるよ。だから、うーんとたくさん冒険してね。
どうか「いいこ」になんかならないで。

我が家のジョージに愛をこめて。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2018」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

80年を超えても人気もの！ジョージ

“ジョージ”といえば、子どもも大人も『おさるのジョージ』をイメージすることでしょう。平成・令和生まれの子ども、そしてかつての子どもたちが親しみ、愛してやまない『おさるのジョージ』は、1941年アメリカで誕生しました。

原題は『Curious George』（キューリアス・ジョージ）で、第１作の邦題は『ひとまねこざるときいろいぼうし』です。すなわち、『おさるのジョージ』よりずっと前から、同じジョージが主人公の『ひとまねこざる』が先行し、現在でもシリーズ名を別にして混在しているのです。原作者のオリジナルは『ひとまねこざる』で、色鉛筆や水彩の筆致による温かみのある絵が最大の特徴です。

元祖ジョージは、『ひとまねこざる』

『Curious George』の原作者は、ハンス・アウグスト・レイ＆マーガレット・レイ夫妻です。原題を直訳すると「知りたがりやのジョージ」ですが、光吉夏弥氏の翻訳によって『ひとまねこざる』の名称で1954年、日本に初上陸したのです。このときの名前の表記は「じょーじ」とひらがなで、絵本の仕様は原書と異なり、右開き縦書きでした。のちに、日本の絵本も横書きが主流になってきた1983年、原書通りの横書きへ改訂されることとなり、左開きの『ひとまねこざる』へと生まれ変わるのです。

レイ夫妻が1941年から1966年にかけてアメリカで刊行したシリーズ７作のうち、日本では６作品が1968年までに発行されました[注)]。1977年、ハンス氏が78歳で亡くなり、夫妻の共作は終わってしまいます。

夫の死後、マーガレット氏はアラン・J・シャレック氏と共同で1984年から1993年の間に『Curious George』の短編映画を制作し、その映画をベースにした24冊の絵本をつくりましたが、日本語翻訳書はありません。マーガレット氏は、1996年12月に90歳で夫の元へ旅立たれました。

読み手とともに描き手も受け継がれて

マーガレット氏没後、1998年よりヴァイパー・インタラクティヴという制作団体が、レイ夫妻の『Curious George』を原案にしてコンピュータ・グラフィックの手法を使い、新シリーズ『the Curious George “New Adventures”』の制作を始めます。これが日本で1999年より翻訳出版が始まった『おさるのジョージ』シリーズで、このときから名前がカタカナ表記となって、日本で最もなじみ深いジョージになるのです。

ジョージの制作を引き継いだヴァイパーは、原作のハンス氏の温かいタッチを再現することに忠実でした。シリーズ第３集までがヴァイパー・インタラクティヴ、その後はメアリー・オキーフ・ヤング氏、マーサ・ウェストン氏、アンナ・グロスニックル・ハインズ氏など、さまざまなアーティストによってつくられ続けているのですが、いずれも徹底して原作者の絵の雰囲気を守り、その遺志を大切に継承しているのです。

戦争をくぐりぬけたジョージだから

レイ夫妻は同郷で、幼いころから家族ぐるみの付き合いがあり、のちに再開して結婚、パリに住みます。しかし第二次世界大戦に入ると、共にドイツ系ユダヤ人であったため、ナチスによる侵攻を受けて、逃避行生活を余儀なくされるのです。

自転車で南下し、スペインで汽車に乗り換え、船でブラジルへ渡って命からがら渡米します。夫妻が離さなかった『Curious George』の原稿は、渡米した翌年、自由の女神の下で出版されたのです。誰もが原作者と原作を大切にするのは、ジョージに命が、魂が宿っているからでしょう。

文献

1）ルイーズ・ボーデン 文，アラン・ドラモンド 絵，福本友美子 訳：戦争をくぐりぬけたおさるのジョージ，岩波書店，東京，72p, 2006.

2）光吉夏弥：おさるのジョージ In絵本図書館（新装版），ブックグローブ社，東京，pp.82-86，2012.

注）横書き版に改訂後、７冊すべて日本語訳絵本発行